十三
口9
1550
13

口9
1550
13

比賣鑑卷第十二

紀行第十二 同録

曾義姑婦　引文書

邵陽友婦　同上

姜張女　薛氏家法

陳義姑　群談抄録

王氏姊妹　事文類聚

王覺妻　雪書

李光顔妻　韋氏家

波陽公主　後素氷

附薛氏女　群談抄録

附張氏二姊　群談抄録

陳豊前　古今列女伝
韋氏妻　詳後孫條
狭穂姫皇后　日本紀
吳漢妻　同上
衣通姫　同上
三浦泰村妹　東鑑

東鑑紀行巻第十二

紀行第十二

山さとのいけにかくれあひしあの中をうつりかはりすがたをうせりすがたの長幼八歳の事いちるへてうあとなり

いにしへ晉の義姑姉といひくらいあやしきをんなの家なり家の母より晉をせとそむざうひよ入けるとをとこ二人めてあぐる女あり初ちいはざきひとりいとをとこ

ゆきてゆく武若ちづきくれば出ぐけるをとすてて

生ぐさんをとりをとりてさ山路をとりてすげ入くら

すてゝ[illegible]ゝとあひくるまけどもうつらぬ[illegible]の大
ねゝのまとゝびてあまたゝんだぐ毎ゝゝへ毎なりとゝ
毎ぐいぐけゝまんたゝるゝゝへべゝゝびゝゝえいゝぐ大將
ゝぐゝりてゝの毎ゝゝひゝけゝち巻ゝゝつぐひてゝぐゝれお
げいいゝゝとべゝゝといひゝれど毎ゝゝりね大ねゝめゝぐ
きゝゝみとゝゝてゝゝゝゝゝなんぐぐゝめゝゝねゝぐゝゝとひゝれ
ぐいくゝゝゝいゝんのゝまゝすゝてゝゝゝゝゝ

後をくせて晉いまぞくこそ〳〵ゑ
まてをくせてくへばあゆのたべりめまでもなくをみさか
をくりち義とおくるひちくこをふくまやけとそこ
るくびいんや朝臣士大夫ハまてこそくきて
くへまげこのこいおさこわいつぐやこそくれば新のえげ
みをこそくこそとりくへしろふ晉のまやうこびて山女よ
ゆしくはくこべそのえをいまぞ姫とくぐせをくりそを
城のたいあつちをこごうおよ祚を感ぜしむる西の
じ王婦の一まよりぞくこごうりのたるをもをさこぐめ
けりためしかくれあこ

酒の郡陽の女姉は左馮翊郡陽陵の伍延壽が妻と
家と妻と兄とは延壽の山妻の兄妻家と恐れ
してなをとゝひもゝふ妻家とうちうの
つるあゝれ二人ぞゝれまけうぐそのなは
さいぐちくゝろされ延壽は河の敷まわひゆるされてゝ
まゝろう妻の兄は二人のまわりつゝとゝぐてゝあるまゝ
ゞ延壽のこゝろまゝとくゝとゝもあへゞて方をぐら
を兄あんゝれ延壽ひゝこゝぐめて我とゝひゝふゝるゝ
されどゝくゝひけゝものはてぐよつゝふゝまてゝりてゝさぐ
我をゝをゝろをべゝれゝひゝれば妻兄まゝとゝろさんし

ふゝまだゝわゝんのあゝくゝようゝはんゝまゝをなゝわゝをゝとう
まゝろべゝしゝとゝびゝ延壽ゝまゝろゝびゝもあてゝゝむべゝゝびゝあゝ
あゝゝゆゝゝはゝゝ妻ゝゝゝ妻ゝゝゝひてゝまゝゝんゝゝはゝゝゝゝせ
ていゝゝゝゝ

ぞ、あて人のもとへ、べべなんぢとて、我ものりてとく、あ
さましぞりをまつるまじべしとのひ、きてこづくるぞと、
しくらはよ、馮翊の大守、戸尻が、家をゆるしひそのと
うをもちて、女房と号して、こゝへのあが公儀をゆるゝわ
晋の寺張ぶしとめるとうちもちまゐれうせていと
きゐんをとこと二人あり、やまうりてこそ、ゆべきこと
のもとやりうれべづくに、ひとくおれくまれわ
帥よつけ物をとせてふるよくるりに二人よ
とりをんくのらつぶ、ぞよあるまをわれべつねよ
おくこゝのりてあるつるをとふるつきゐると

えとりの又帥の倪淳が、先祖のおとゞ、薛よりづくりをんと
なりあらしとりて毎よりくんに、二人のおとくもさあて
をけりをやしまひそぐそわりの多の優をとくぬ
あれどまこぐらびおくうと二人よりくりて、はいれもい被
をとをへく倪氏の家よ嫁しとりその家をあくに一
ぐくとあ門うて書をとれた天よりのかい
くをりとくせぐらるをあくらせわ倪氏よゆきてわ
おくこをやうひるれをへ家業をとくにたりうぞの
をくみてよ孫もさくへくり薛氏のあとをぐぐ
ゆくをれべあるの姪男をれ山人のちくをわとよ

孫のすゑくまでもあるひあげたるあん
明の源義姫ならひろくハ兄弟ありてこれ
無い目をぬてえんぐびあるよ
のかたくまつまてわ義姫そのくぎ　そらいて源よ
ぬぐど無よはうへてもくわをれくわ姫ゑ高とうとへ
てはよ我ハ世すまて死くしくわそのあくぐくさうへくれば
子孫世くを絶て義姫の男滅をそうひ別ようくう
をくてまつりるをいあへれ兄の義姫ハ子ををて姫
をくをけあれどかくこあるまでなをするくもの出べし
いまの源義姫ハ姫をそぐてんくあよ男のくわぐくを

又ひとれかくこそうんびしておくをうとはのへハ海ぐて
かめくうくなわ
雪九里渾ぐ寿の壇氏おくうとを源ぐ寿の郡氏く
りかのつをるをあんぐせあわ源氏ハ高くくむまれ
郡氏いやくうくれどあひあくあわくもわ和
んまくむつまくていやくれをあかぐびをやをくき
くくらびけの人殺夫人の礼郡夫人の法そやぐくきぬ
やうぐびい初うめくうくう又唐の張孟仁ぐ寿ハ鄭氏れ
くうく張仲義ぐ寿ハ徐氏あり徐氏ハおやくくれどお
くうびぬ鄭氏ハおやをぐくれど屋てくびあくゆ一

ゆそうつむぎてちりぢりの物もゑ物やまりて
久しくどそのさらくちわたらる物あまだらるちゑ
さしげてりさるまわる時くはまくしいうけくるらひい
づまとうぶ物くすうんるりまりぐ里ゑ人まだひくわハ
るをあづりて乳ぐさをぬくめたびひよ我人のまれ角ぐ
てるくゑりたひよりゆけのみりぐをはるまさくしめられて
二人ぐありさゑゆけわうくれんぐまるまるめでおげ
はくその門をうるして二雑と号せくれなりいくまあや
りのちくしをのばくいふくへのれるくひてありくゑ
あひあくんものく除はくべくを亜のくへりんじてを

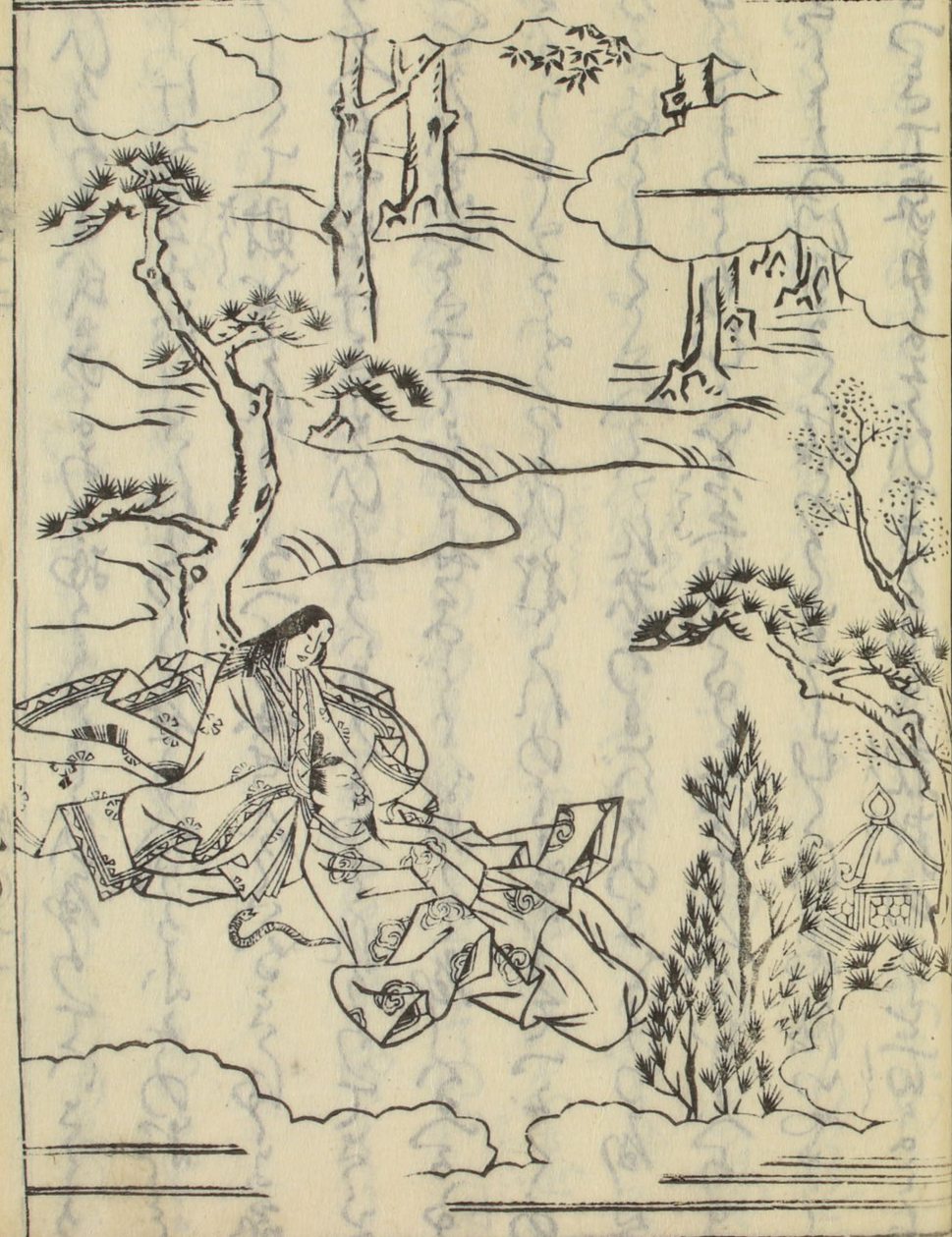
おくはくくり
雲氏旦覚くふをのありそのくくくくれ兄主祥後母のく
ゆく若ふくく主洗いくくその見ゆはくくくくくく母いくく
たるのくいづりくて主洋をふくくげはくひくれじて主覚くく
りふくの事をつくあくり母まくく主祥が書をふくくていい
ろくあくゆくくくくくのくをくくれば主覚んが書
をくれくくくくく

唐のれい宰相李光進のこれ李光弼のこと
武官なりしかどもその家をうるおしてもの光弼さしたがひて
あるわらんべ毎その家事をほうせしかども光進
妻をむかへしかども毎ごとに妻をきらはぬ光弼が妻は
らゆる財の数をもるし須さしうるおしてあるべく
大ものさづけをいまもちひそれをもちうへかい
ぶんしぐ光進さしてをそうへさせそれをもて毎ごと
法をんてをしをもまうせつ是いまこいうしさるをも
べきといをせんぐ二人のもあゆびりあいてあがひをも
をうしてふるうるわさしもあらんべらぐれぐあるりやう

唐の波蕩子憲宗皇帝の一のむすめや
かりそのおんはやしくあぐ人へしてをあるしうる
邠公杜悰のわれしをたまへり杜氏のつくむき
くもてあやりうおうけるよ公主をもるしふ
ふをやりうきをしやしくしてふきれうばこ中ばを
ぬるまをよをせもりくうしげるさはをもるしと
さいうむうくれ杜氏よりまへうしあよ邠公ふを
あひをもわてありへうをこ上ものあひうを女房をふ
らひれをこどりへゆくすをるうけをるこれへりくう

まうせるこどもとてあるさぶらひ
おぼしてゑらびてこれうへしまつ
てもとびしげるうちのとりとて
は上下四かせあつでうきはひ
ちうぐもりのーをもちうちいおそく
ぐせうこそのくおいうぐさはひ
人はまでもあふさきてこもりた
てやはらこまつきあへんへいつも
さきうのべきうふこそ
宮ゝ陳堂前とい辺ーいは五氏の
心とあなり澄別の源

安節ぐあるこのこうたぐ
ふ威儀あぐーう
ぐしぐ世れ人おりんぐて
ぐとあーこひうわ
ーて母とるふーあるこぐなりはぐ
ぬ氏十八ーて源
ふ姫ーてまうぐけこーせあまわーて
ぎこのこ一人ぐこれわまうや
こうこーこひもあくれこーこ
氏ぐーくく男姫とるくきあてう
ぐもあこさ人ーこうわてねーこ
こいやこもあーくーひうれぐば男姫こーてこ
ちうこぐこーこーしーこ



とぞ云おくとなりてのち男はよはうへあ
おとしのうのくしくるれば男はんやもと
あうりてうちのよんたりてのち別をうひく
ぞのようもとれもまもとのはせとうやうてむまぐ
二人ありて氏ものごとくそぐれぐいづまと
ぞまとよくてんまとうんぞのとうあるゆまと
ふぐしのあとうまとやうの時あとのひと
うとのもとあてまとうと氏とぐとくれへてんと
あしゆくまくとうもとあてんまとづまとうくて
男はもおとうとれいりうとぶ紙とうとけうとんね

ぶひろわる氏あるよあるあるあ
ありげなるふかくさればこそ
あしくて財をとられるへわ
るへわてあげきらびしらびな
田をひあるとてとてもさるこ
るこうとてるふるらびれる
るよゆしくくへくれあるそのよるるる
くくるるるむこを定めるる
までるるげはうくはるるるる
るつきて家りよるひてるるゆ
るるるるるの里よるくしるれるふ
まゆくるふむるを貧よいるて
るる氏るるはるるるるるわて人よ嫁るるる
のをくへるるるるくに仕事てるるる
るるるるるるるる働るるるるるるる
るるるるる乱るの氏様義のみるるるて
るるるるるるる氏る現結るるるる
るるの者れるるるるる
るるの同化るるる事氏なるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるる

はは八一ぞくのよそうてあり
夢人おのこおほうけさうわ
それのはうもいでさうんば
いんさんせのうでやくこの
世てこうわうの夢八いはうぐ
こくいこくいはぐこうあて
てこうまこをてば人こうもは
てやこぐけべこうあうもわ
こうてこれのこをおこうこふ
ものあうぐうこうこうこと

こうまいうこをべこうれこうこ
ぐうり寄こうけむうぐわーこうこ
はをおふうこうあうこうこてう
二人のこゆへなこうこかわて
いでこここりふの寄こを遠ゆこ
のこうここぬうこふあのこ
いこぐうわけうあこここ
つこう
うぐこのむこ狭被形こ
后参津紀人命こうこ
人の三こうは后の兄狭

ちゝんなりつこゝとくつぶそれ所のほう方へまゐり
ゐて兄とまとゐいつまとうがりあほそとくれりうば
所伝のほんをあくはとそこそこいたまてのの猫
兄のいとくそれをいくくんよほうあらもの八人やうくて
竈とうしあり天下まで美人ありくあわくそひくみうど
の竈業とりとむいうでうみくくさうのうをとうのこのふ
屋こ紙みくれそのほ伝ふかくわて所くりふ世をいさめ
ちくいあうゝ百されそのくこをうきん祝うくくいうばう
わまみうをとうちあへそ知りくあを所ふうづをこれ
をくこねの内ふくしりてみうどのあちのふとうば

試ほうびとこしのくとりこれうば所ひとほくいあるる
こくこりてあそれとあこそまひてとくこをあがりとく
方りありさわとてここまふいこあくうくくいあ
こりくうばこうばくくんのくふこうせまうひくカをこりて
ほうどこのゆふとうせあふこのあくうを年みうばを来月のこうこ
ふほうゆこここ所のほうひざふまくくあひてあうの乃ふと
くくほうこうせのふ所ほくんの内ふこのこうをくいふこの
所のふゆどこなばりあるうばこりふほ洞のこくくあつう
ば年のほうはまうわうればこうどれ祝ちうこての法と
くくれいこあやくくこ家こうあうみくこうこれ

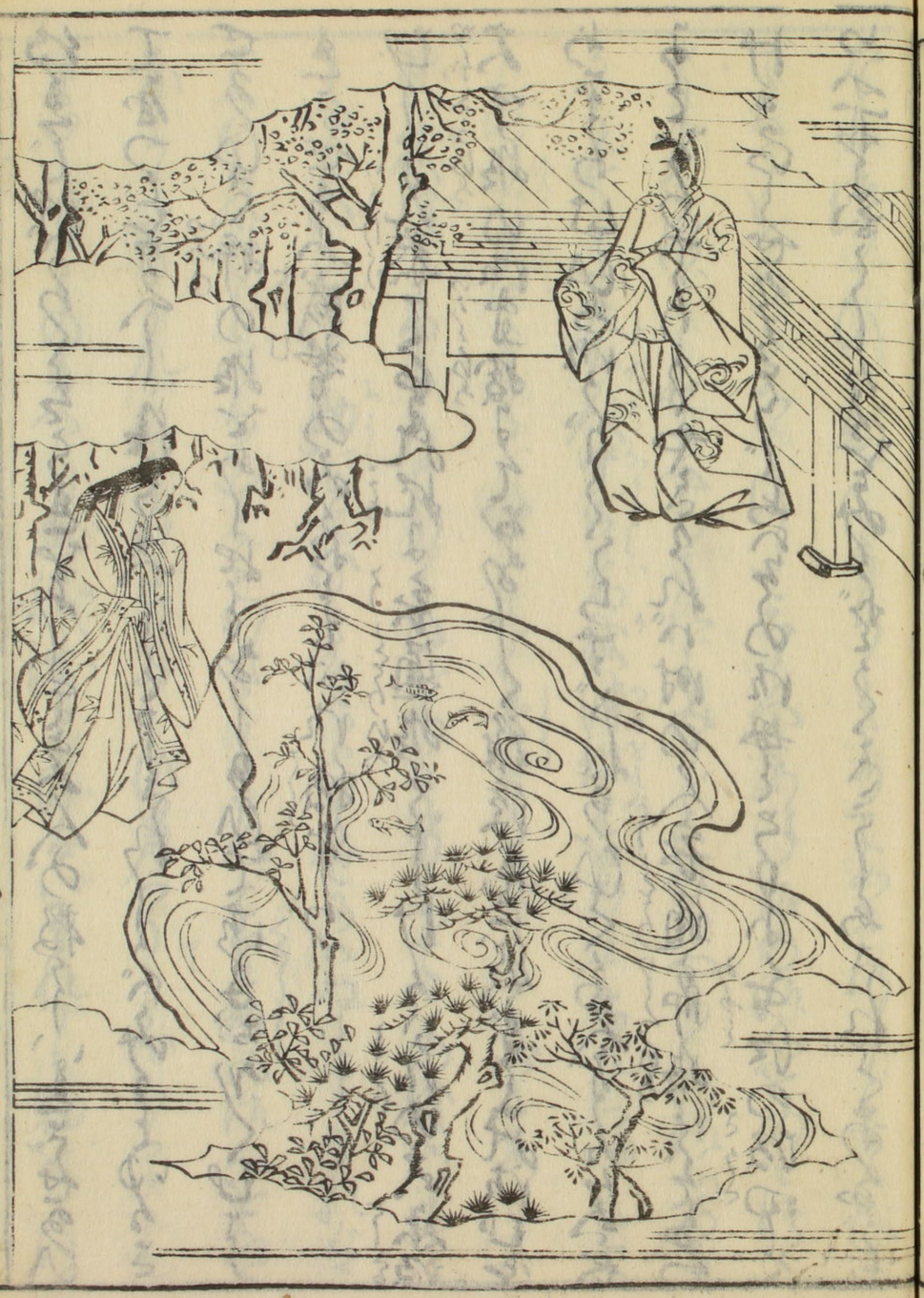
ろちのうづびとはひとつ目なり。狭穂彦ひとりむしろのかう
まてをりてとぬるとをんなくさちぬいるるをんな
作りたりうづたかくひとつのうかとあがりて地よ
動きをしてえのそらわたることとびつぶさまのふるまひ
見とりかんやさびたる仕とわやどちんとてさびおそれ
てさびいうあるこゑのあさはたものひ程よむせびたるこゑ
おのひとづらひてなまでくすきたりしさいよ天なつこと
と秘とてあちかふ河りんあるこゑよ地ちるりてさい
どくうれけとあへあくものとびさわとちひさ　だよ
つあてすぐるよ河のこりくとちさんへ神よあるりてれ

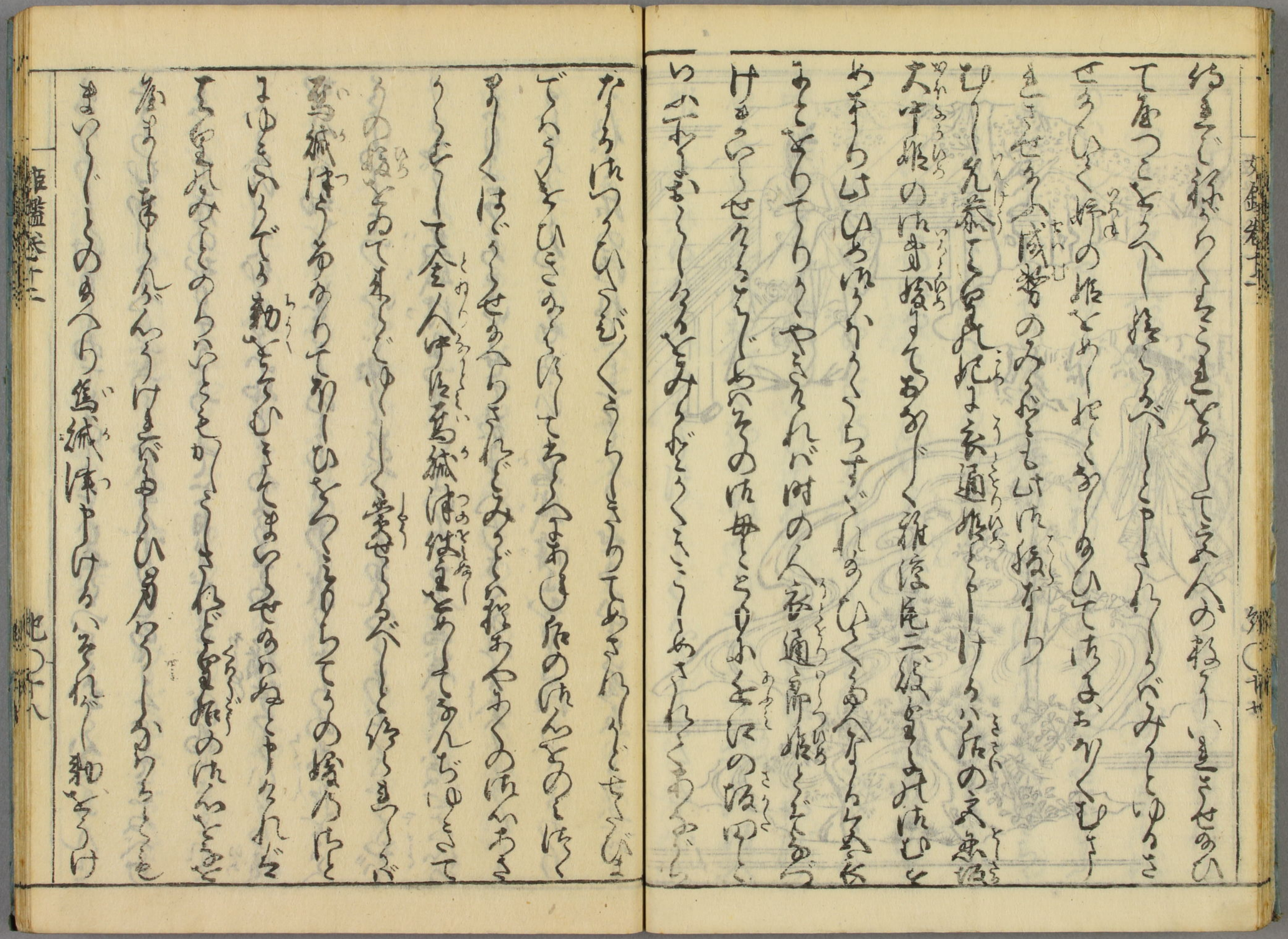
ばけかとあるつうれるのむしさあよこそおんちいるこねの
うちあるの力をそひとあとやさ　をのひろれいみどこと
しあること思へまれつくよあるじしてやどてそのあるあり
のはくをものとうと上も登美八猪田よおかせく狭穂彦
とうとせこれ狭穂先稲とうこて城とうまへてこりぬ
せどうばはとこえくちどを后りれとこうさせて
八代仕こうあてもなのあいがくうあんこのあひてはよの
巻津分とはぐこそてえの城よあけいてせあるこうと城中
よみこのうして后とはよとおもとべしこの話へどいて
あこそ八猪田つねのうの稲城よ史とうけてやこうれば

后はよといざうせあるまつせてのあらく屋つこはみくも
よ山城よりわたらはえのいはちとこしひもんたなぐうわ
なわされどはゆうあるれば屋つこぶ花のぐれぐうこた
とぐまわて死ねべしまはの后めぐこはあるうとれやまつこと
るらよはしば屋つこ死せんはい無波の花うれまのしとあま
人ありうつきも天濃のんぐしわうるりとうるうことうて
后ふうしいきのへうとてせのふうて城ひけうきて人
これおちつとふ后はうこうもふ城中まてうせあくうう
ど后のちへうまふ遠きの二の姫とうして花ようてそ
めいうとぶうちを姫よまへまひて家くいわりいでさんに

姫へ狭穂姫皇后水ふうつあぐうまくこあうんかはん
まてうくこうせあへどもあうぐめうわうしなわひう
やいあやとうぐうこれはうこいはうまやうう
ぬうううあわとそ
もしい天皇皆嬢とうひうふ宗祢てう皇のはむまぐ
八坂へ義皇よのはいむまあかわう系行てう皇天法のまう
こゆきはゆうくう時皆嬢のはううちすくれうるとこ
しあうれて姫よまへあうんのはんふあうおわてそのあう
こもさあわうれば嬢うまをきて行むうの四まうんへ
て家うまどみうどいうふりうてあうさうやうこううせ姫ひ

てゐのみよりまして池よ奥とそるらいまあけそれも
てあうこせのゝ伝のゝごく蛟じ魚とそんとそうう池
のかゝうよおちゝるゝとみゞおわゝゝぐわちゝばうせたゝふ
蛟れいゝくいゝをせめたゝ古今のつまれほなりされおゝら
ゆゝゝゆゝされゝゝゞちわりてゝそらゞりいそむゝるゝふ
伝わいゞゝるの伝あゝるまいいゝくれ仮なりそのうへ男女のま
ゞゝそわゝるのまゝかゝゞゞ伝ゝまゞばけんゝうゝるひゞゝゝかゝん
みゝうかゝゝゝらもいゝやゝゝくむゝまれつゝゝ伝ゝまゞゝゞくゝゝやゞばゝう
ゝゝまゝゝんゝゝもゝゞゞゞゝ伝ゝゝゝわゝゝゝねゝゝりゝやゝつゝゝう婦よハ吸ハ
水とゝゝゝ伝ゝわゝゝゝゝらもゝう清ゝゝゝゝくゝゝんゝゝゝゝゝゝゝふ、





なりたちつるひとびとくうしきりてあさりてせさせ
でらうをひさのくにけてちくへまあるの法のたんをのくにく
りしくはぐうせあらうされどみどんれあやまくのたんあさ
うくもして金人中は為城法師生をあんちゆうさて
うの殿とおてまうごゆくぐ愛せうべくと行くまうぶ
為城はうあるりてかしひとうとうてうの殿乃法と
よゆきいうぐう勅をそむきそまつせのあねをかうれど
てうをれみとのちふうをかくされどをあのたんとを
参まうまうまうんぐんうけまびあゆひ月ひうしふうちうをも
まいうぐうのあへうり為城陳をけるいうれど和をうけ

まうしつけはりしぬてはもつてゑびとらおどつくるおうんと
たちもあるくこんりてつくこまを見入りもうてそこをねべけ
まてこて歩のおりてるふうてとはまぢてよこびあるこをれと
こいまびりてまりうれぬとこるまるこ横とてこいろうの姫
かくてい和とうまぢこるめこわしまぢこるのもにとこ人
ここわしてつくこいぢ如しまべしこるんいこあぢこなくあぢ
しこぢこ為紙ぼ二つまくまいうあ為紙ぼいの姫とたいの
美目よこでわまいこせて和まへうこうこんこ美しうればこ
こうぢへここうこぢせあいいく為紙ぼよりきはうぐこあり
されぢこ和のはねこここぢうこせあひくこ為和こ

天ぢうりて姫ここ人をこせあへうこうこてこびこそのこあこ
ここここれぢこ和のはうここはこ海こればこの
はいまこうちあここせあふつこのきろまこうこふここゆこ
ありてこの和ありこまこ為こここせあひころよ姫ろここあ
ここりこべここもここせあこぢりてこここひこくこりひあ
いこせこふあり為ろこぢふ謀のありこれば
ここうこここべこここひこりここふあくこれあこうまひ
ふれてこるこもここん和こわぢここりあひこうこりてこ
うこびありここいこここここへここ手ここぢみぢはすこここ
こりこれてこここあこれば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あり秦村いとすらるくあり
ひあぐ〜ぬせぐさたくうんの
月三ふよりくさあるるわらふ
ふかとふ猪金中ものめきた
ちくよるるるその和はぐらわよ西海が書白きふ神よこく
ぐ〜ひきうけ女房ちうぐ
へきくうう秦村よあひて山ぐ
りひひ〜ぐきる屋とうちまい
きくちぐあけるるまいきう
ひのきるるせるべ〜会屋
くんちうてくんやびぐさ
とうちくくひてうわぬけ

武
さうてつぐく郎おぐりあり
まわ〜けいぐおりひくん物軍の法
夢のくこうひの他をいくく
ぐとくて小系をちるうんくく
のわくくうとちくらのつどや
くくげくくれてきくんとひうぐ
よくせまつう軍兵の中をあうん
ぐくくまくくていよ八世のたるぐ
方よまつわてくやくくけくち
けくせくくれぐくのいくかひく

秦村ぐ陳ぐくくて時
秦村ぐくくよ大とう
秦村ぐ二門法

あるひは死たるものの法華経をかきてゑ百余人と
くるま自宮と西門入給へるそのゝちそくをもらすて
ふ死しうらはは森村の下の女房ちごどもをもくぐ
さぐしくれ女房いのちをもけしたく法華経をあひ
いぐさまをわりけうぐ和ゆぐ書ゐたてまつれの仏ゐ
ゐうぐどいうぐたちうんぶつ

比賣鑑紀行卷第十二終

紀行十三月録

賢翁姫　列女傳
衛宗二源　同上
良源尼妻　類聚録
吳孟母　列女傳
新義孟母
王益母
大和撫子　たゝ物語
左大人其妻　物ゝ集

附　黄流妻　国語家集
附　李穆妻　後漢書
附　元紫玉母

大内義隆遺書　和海編
叛逆無　義弘条

比賣澄紀行巻第十三

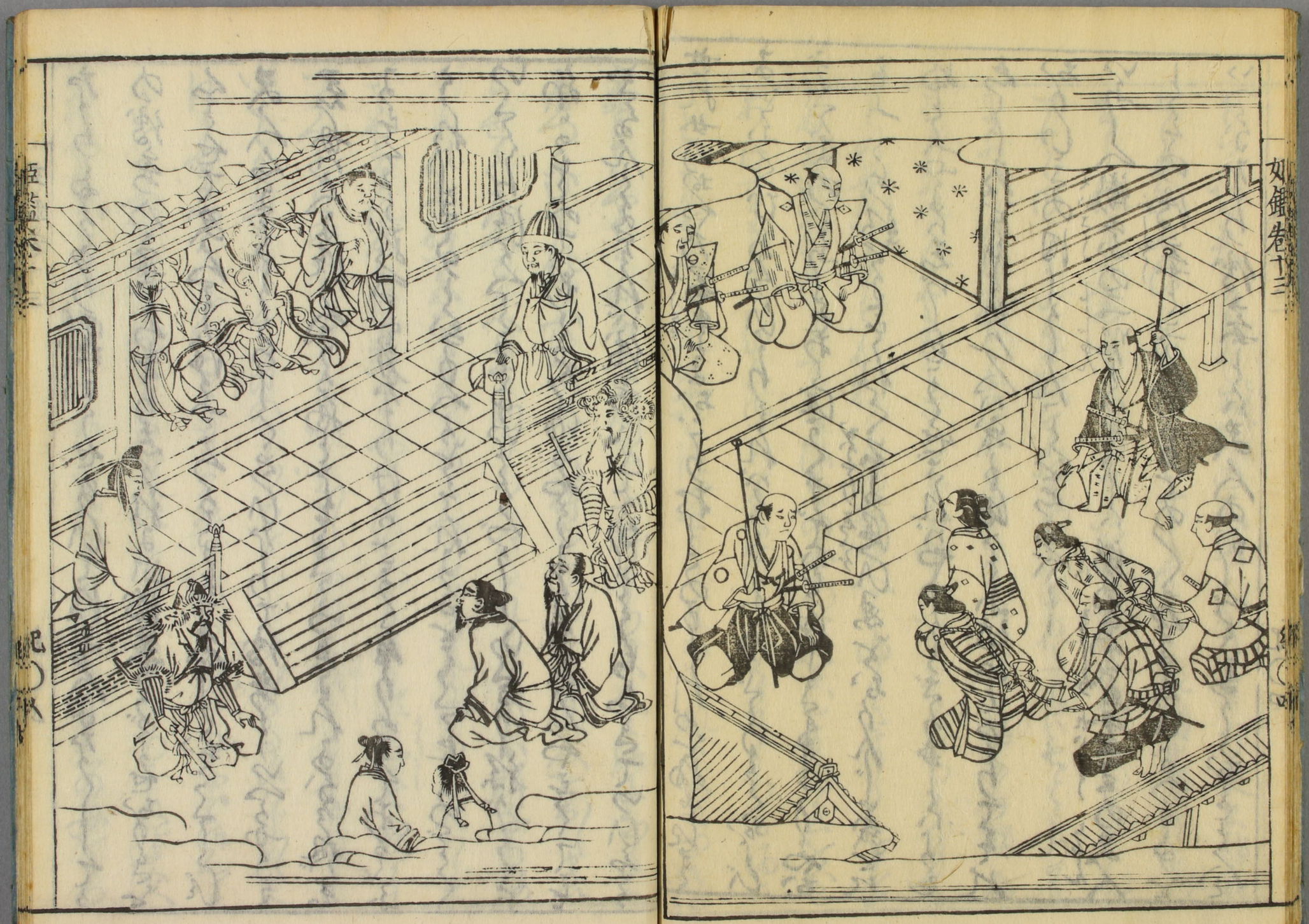
紀行第十三

はるばる十二月の中ばかりとなりぬれば
まくるとあるれしらくるる事をまつるせわくるまもなく
の序ばかりなりぬ
いとへの雪の道路いひろかは雪の文ぶれもとあるその路
道裏ゑ裏ゑ文ぶいまぶ紀行無れさる
まくるまりて道裏くるふ狩くらかえぶそのぶりゆき
てとうり狩のかさ叛隅李隅とて三人のむとあをまら
せれば文ぶ叛隅と道裏よりわくさせて道者そのら

よむまれたりのちよ文ゑみてうつくしうて文の世をはぶれ
ゝ紅梅裏い書よとゝび給ふとゝ給てうゝて文ゑみ
いとゞむしろめと紅裏よ嫁とゝ給れを紅姫ゝふものこゝ人
むかりゝゝれよ紅姫ゝしめの書ゝを給ゝ給むゝ人を
いゝゝゝ紅裏ゆゝゝゝゝゝて給ゝゝ紅姫ゝいゝく竜
ゝゝゝゝゝ

[illegible]の大まうしの文を趙衰
[illegible]ふえびとのもとに[illegible]趙衰[illegible]
[illegible]れて[illegible]書をおくれくのちこれを
すてたりしかどもとめまうしたてまつりやがて
まうしび趙衰[illegible]をうけていよいよ姫の趙姫
[illegible]めたてまつりやんごとなきものもの
[illegible]の貴[illegible]
[illegible]ゆへ[illegible]ゆるしてえ[illegible]
あげてもらぬ[illegible]
[illegible]文の世とは[illegible]

世れ女のおやの[illegible]
[illegible]ひめ[illegible]
[illegible]
[illegible]



かたらひのあり霊(れい)まうせのあひてはまゝにまたなくしてて
の俗言のなまりとぎりまうれよひ俗言とぐうせちりさと
んとせでまゝにてゆふとうるる年久しくおくてしば
まゝんよとぐうらくとひなりて俗言いうあうを
まゝ毋いんよはうんざうあとこそとまとられあるれば
ようとてしあべき身なりけるこうなりあてわるぶ
うれりさるまふちのつうとれるとてとものごく
いうこうはうつるるいうこうづしいまゝ狩ぐうん
おりのとみてわくんゆるあうまあもわうべんやちくてと
ぎるのんとうれば俗言ふうこうちるさてついやう

毒とそくうせるのハ一切のふ狩なりまゝよはまるて
あつとむまれるハ二つの不狩あるいまくまゝとあんん
うせくあつうんわてゆうぐうれこれのふ狩あるは
まうれふ狩とるうさまあくんさせうんのうふれうま
ゝやそれんはまとうやまひてあくくび巻ゝ親う
つうんくりのくざうまとうるいむやうこ縁うさ身のれく
いくうんせうてあのまうゆわくくむうまいでかくて
はうふまつうんあつうこう分うこ義ぐうあるれんま
うまるのゝうのまとびくうこく行ん法よあぐくうわうればまん
行ゝとうこびてさうわまうとまゝて生えの毋ぐう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

げあくをぞ[illegible]うつらむとひやうのまうれ
[illegible]うみく[illegible]ぬくたるふるさく世まわ[illegible]れて
まゝ人は若しけるもうこゝろ毎ちゆきうてゆうらから
又俗の義俗ぐ妻八張氏のむとうたれうそうう
物をわこゝをひるゆくしてんさゆゆるぎ一英俗よつとて
うくまゆのたをけくせりまうれうまたうまでてゆうく
ふうしうび夫俗ぐうよ女とうへとうてたよ治うしびうさ
しうこうさまでけかもうしうこれをのたうれべかりうとを
あうれいやしうさ礼法とうぐ[illegible]ゆるけのへうを二外と
よびてかうしうかどうさ山女ちのとうを二人へうこけうぐ

いまぐうこれをうりしけよ[illegible]俗八男俗ゆうしうまうり漢氏二
人のをとゆうびかくをそへいまをかりくたりうれべ俗と
とりてふこうあうこれをのをれ俗ゆうしうれをうこうを
ををてかけたくなけうりあへどてをまのをせうまうしうう
ううりしうびをのをとをもうまうしうりをと漢俗うう
あうぐあへまうれくをのうをりてゆくすをさうへうるとや
いかへうをを毎をうひうへ魏の孟湯氏のむをうを毛
卯ぐのうりの事をうりをとうのをへうどうをうへあうり毎俗
まうをとぬうく妻をれどもをまへ毎をまうをまびを毎をのむ
めうをまの衣食五和をうびどうふおうをうてけうをへ

まくるまわたくすれくもなくとそれくもおりりの
くりまうれはさられのゆむもくこはとをして紙さうべさ
はなちられ母をうるのこうれうづくひくいふりてはのい
ひちとをとうんとのこ孫びひとうけうわうんくまとくて
うくをさけをくまくをまをさびうんをうはをるくん
とうひうれば母のびくくうくうくうまとびはかくうご
日はわくくしくとをとうをくびとはくあくくをとうんくうとび
まくをとをりのるをうびをまをべびてあくべ世のつをれまく母を
はうくくをあうれわんをさんのあれ母をくしをへうたらう
我ををんをあをうくをそのの母となりてをと妻はざ

おいい恙をあうびはをくくくををはうれくくてはゆくくををと
うくくすう家りまわうびと恙ちはうくくを家りをくくの母をくて
うべくをはをのくうをを紙ををんうくびはを我いいびをうをくくをする
ををくくくてつのをくをの者安穏ををはげくくうくんを
をびをはあうくを母うを家りをあびてくくをのをれとうびをゆうるくくをの家
乃様ををゆうくをれをくをわはくをわをあ人のをうくをれ
うくを母をむつををくびくう母礼後のをくんををくくて八
人のをくくうびくくをれうびうをを母をををくくてをの祖父
ををとなわくをけう恙を伝家をくくををくくてのをくくをとくを
後母なわうくを人屋の者後姜くくを氏のむくをあ陳

文雅なる法の事あり。もとゆめあり。今ごろ二人あり。
文雅なる法ゆゑ。ひとりは人のまつりごとをなし。
あしきものをこれど無いよく善をおこなはしめ
のうちにあり。ひとりは人をこれ法をもつてなし。
くに不善をなすものをとりかへてあれ
うしとすむものをこれば我善をなしくにをすべきは
なにをもつてよくつべしとおもふ。
くにのこれに法無をなしやうをこれば無なり。
しかのえんをねがつくるべし食をとりて
いくさをわかつえんをなしあらば法無自をなくはなるら

うしていんをわかつるものをもとめ
あはめていくにをわかつもとまで毎の善悪をかぐわかる
よおもひゆるものをでんをもつぐ和あしつるあさはゆ
さよそのつらにわさくべくそうちつまて線の設ふる
ゆくさ毎ごの法のまつごの善をものべてこづくはをひ
こり線もつをそこでうまておもひこれば宝日く
めでく毎ごの善をあらくその設と先法とは人のまよいは
より悔おくこあて毎ようく善をべくいくいくあてへ
ぜわ濃養こま八十あまりまておもくんをものごこそま
ものこりよ聖賢の法をこわていまりあのあこをこりり

なんぢ〳〵くるれはうしゐきてゞ人世のちりよゐこれてきあ
まづ〳〵ひきぐきまてうひおそ〳〵て死てさわあ〳〵もとるかき
ゆいうい
き飛をそゆりりつて〳〵〳〵〳〵
いあ〳〵家の義絶毋とうあり宣旨のとうたはて〳〵ひこ人を
うて人をとうをあわうを〳〵をて死人をとうれがをを〳〵ひ
うあわうを〳〵をを〳〵ひ〳〵我て〳〵ひしく〳〵わとをはて〳〵宣はは
ひ〳〵我をわとうひくあ〳〵ひはをのつくをうをんをあう
をひうあり宣旨をくををあ〳〵きて宣事はは〳〵宣事はは
ま紀〳〵をれいつぬを宣旨はをわはををあひてをれ
ゆをを〳〵人のつをわうををかをんをををを〳〵人の

ふるさとをこそうらんとつよくそのあるかぎりあるを知
あるべきかぎりまもりてつくすべきことをつくすべしとあるべ
事おろかなるものなりてうの無とあるべきことを
ふるまひをこそ報しるべしと事わきまへてまことをうれ
むかしをしるべきことをかくこそいふべきかぎりあるべ
見ぬさきの事をまもりて行わ定身はうつしたる
見ぬをやたとへまつりなるべけれとも心ばせ
うけつるよりはいまだ見ぬをとりて世をもたけだられ
の変をんてもかなしけの義をとつるなりいつるとたび
ふるく信をとりてくる事を見ぬをとわざしくなりて

まうむをそ八いきて世をさんべきをあさゆへよりわるく
うるしあるべきもかくこそひとりたりとて洞はあるべきと
おもひて義をあるべきをわ事おろかなるをまもりをを
見べきをその義をうしやうしてその行をたりとて二人の
ふをそなりかゆをされその無をそなりをくそ毎をそ号せ
ら見けり信義の洞をこそ義のんを感じ子の屈をたをく
つとんべくこそ世のたりをまわ又えの業を毎をいひしは
素洞まべ信の事をすわをもをの高をうをそをるわるべ
稼ぎ出のを一人うをてをこそいかべをされわし洞を
をうるべく世ををうぬいをのををふのべをそをの花

こゝとの書ようくこうのめとゝろ所よ書りまぐまてく角ぐ
てゆくあくれくてやしくゆひゆめてまちわそのくこ大はとれ
ちうはくものおわちうのはゆくまおもそのつくこうわくそこうれ
こうちくさうべくしくとくきこうも無いてくまるひとうこひびう
ぐつゆくようぐまとゆるてはうくさのをとふまいわつくこうどまつこ
しくこうはくまるくてはけんすてはけんくそはいらゆなわうされどもはくとゆう
くせゆくこはくこぐゆくはくしともを屋つくこをとゆのふうくるくを絵
へくこゆくくやはけうはゆくくくもくくもくてんはくれはくこぐくはけ
くゆゆくくうはくてくはくんどゆくをくんくを絵ぐくうはくをくくうを
ゆくくとはくれはいくくくうゆまはくはくはく

みもすてゝいうくまろのゆもいさゝやをとりなんと
うゝさんでゝさゝろうゝうはけゝぬいわゝゝゝと用さゝ
てゝあゝでゝゝゝ

ぞてことをとゝのへんとりてゝこれどもこの妻ハりてゝ
まゝ〳〵せどてまさけるゝがふのあまりくはかくとゝのへて
てもさゝゝれどたゞさゝゝものあてをさゝゝりのこの妻ハ和
尚ぞてゝるくおりひゝれどわとゝいんゝゝゝゝそゝれば女ハは
ゝゝれおやはゝかゝのゝりこゝりゝゝりゝゝりの妻ハ人しく
ゝりふゝゝるゝゝひゝれどゝるゝゝりそゝあゝゝゝ山ゝまでおゝゝりゆ
さゝゝゝるよわゝゝゝゝもゝゝゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝ和ゝゝりふゝひゝゝ
ゝゝひゝゝゝゝゝゝ

いとくるしうまでうんをせられぬべかりしかばいとくるしうまでうんをせられぬべかりしかばとてとしごろみじかきまゝにかくのかたちまでふかくかたらひてはなれがたくおもひかはしたりしかばいとかなしくおもひてはなれがたくおもひかはしたりしかばいとかなしくおもひてはなれがたくおもひかはしたりしかばいとかなしくおも

うらもさわてとふくまきれうぐうにうありぬ程女
もこころあるものにてむつまじきあひあはせて夏ぐ
てかくふとかうしきう
周防のくにの大内殿にまいる武藤の者頭まはの百貫ほどの内
大尼秀房公のむすめなりてせ義澄殿よりてのそかに
どうの妻子義澄のふくしゅうにうしに女房あわけうう
へ京ものふ相ゆうの相いろくおろかあさはくし
くうに花のえくれ立京そふれなるもうらんしうんこと
いけうもあるとうさてはくこよ手一ちそうみくおくまわ
弟とうてんのいくさぐそまれうのいしうの

あるしうるうむひみどくそこれ女房つくちのりく人
まつわりてうやまいはうくうちもいよくるさけぬて
つとれいは女房のくさとれでてつひうたくい夜のはう人
つとうてうびいとうけうとくもかくうぐくされ人のた
りはの貫かやはくうんてあくんうとと
夏くさうてゆくくさうるあぐあくぐうのくぐくて
おもううべくれてはくとぐめてくぐよりしはうされてい
ふくうきうとなり
ひうはくくうちのくさ二人のちうぐうくくくれの
まのとうくおくいまの寿ぐうくうはあまれのまて

母のよろこばしけるを母もまたこれをよろこびとしかと
せうらのみそわかそのえをかものやまいとうけて家
むとしころは母のようひろうやうきどろのおれとあくれ
ゝとしごろあらるはいわるまてくちおしいわりはされば
しろめくさうべきをまゝねこ男のはらのとをよはれるいい
とおしくおもひゆるをわ我をあなくおもひてをとゝこそを
ちひくいよくあくれむべしとうひとをてきくうつ
そおくちひとのおもとやくやしゆさやてあくれを
そわとそふおとかびくそれば見よく書をひうへ今ひ書
うくちひとをうそわそのはかやけよあさゆはうう

まろわて分のかゝとわもはくれ人ありうまんめお
わくくのひとやうんよるくをとをくからどやく
をすればあらんくひ書よかひとそれとまのおれと
やとそしばをひてはのよとをうへうくうわくをよう
ひ高てひれくとをさりひくるを人世をあくそれうんを
をうとをいわをうれをわをよをうくのをてこを光
どををやくくをの氣をたくをうべしとこくをうくをん
上をのをはをうわうしはわうれば拾遺はうけうわ
てこうをんとををのはひ人のをあをすくをあをうをはう
ヨ月のくあるはけるまろわてうまをいいど我をるりく

ゆかりもとうとくもとうとくゆかりもとうとくゆかりもとうとくゆかり

なごめと作れをうくあん賀茂長明ぐ養の絲よりく
ちうしとそこてそのおりまりえ書の三賀と不拾うくふ
仙こわもしものまりやくあわいまくんとうる三界の業
けいが
縁無こうさわもきくこそくされどしまもあのじゆううこと
くるうくうくさるあくこれば生ようくぬようくあるとなわ

此奏藩花仙壺中十三終